

# 精霊たちの棲む大地

## 春を呼ぶ精霊



lyric by aono

photo by hiros



柔らかい光が木々の間から射し込み

枝を飾っていた雪はすっかり消えて

地上の雪に 動物達の足跡が増える時

私は知る

春を呼ぶ精霊が この地にやってくることを

白い大地の精霊が この地を離れていくことを

私は知る

冷たい季節が終わることを



心地よい音楽にも似た

ささやくような水のせせらぎの音が聞こえたとき

私は知る

雪解けが始まったことを

雪で覆われた大地に川が姿を現したとき

春を呼ぶ精霊が　すぐそこまで来ていることを

私は知る

やがて春を呼ぶ精霊が　皆に告げる

「そろそろ旅の支度を始めなさい

私は春を呼ばねばならぬ

もっと北へと移動する　その時がまもなく来る」　と



私の故郷は 最果ての凍土の大地

仲間はどこへ帰る

私は帰らない

例え 次の冬までたった一人残されたとしても

私は帰らない

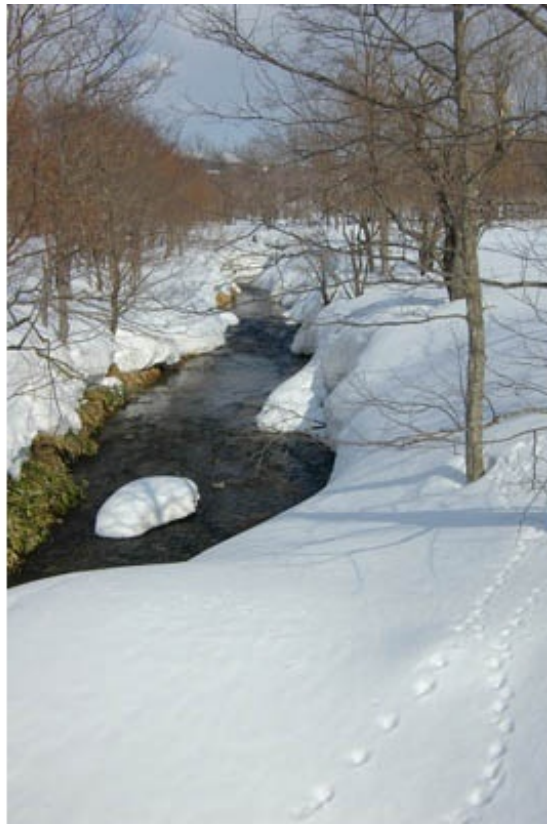
春を呼ぶ精霊が 私に囁く

「お前は本当に帰らないのか

それで後悔しないのか」と

薄いブルーの衣を着た 春を呼ぶ精霊が

同じブルーの目で私を見る



私は答える

「ええ 後悔なんかしません あの人の姿をずっと見ていたい

もしも北へ帰ってしまったら 次の冬まで会うことは叶わない」

川幅がますます広がって 土手の土が顔を出し

春を呼ぶ精霊が

森や山や湖を 春を呼びながら巡り歩く

木々の根本の雪は少しずつ溶けて

人はそれを根明けと呼ぶ 根明けは春の始まり

冬の終わりを知らせるしるし



私の恋は闇の中

冬の終わりに根明けがあるように 闇の後には夜明けがあるはず

春を呼ぶ精霊が私に告げる

「人を恋してしまったお前に夜明けはない

仲間と一緒に北へ帰るが良い」

「いいえ 私は帰りません」 私は頑なに首を振る

「人が根明けを待つように 私も夜明けを待ちます」 と

私は頑なに首を振る



冷たく凍った大地からも

福寿草が顔を出す

私は黄色い花に話しかける

「いつもこの地で生きている貴女がとても羨ましい」

「空を飛べるあなたの方がずっといいわ」

黄色い花はそっと答える

「私が花開くのはほんの僅かな時間なの

一年の殆どを私は土の中で暮らすのよ」

それでも貴女が羨ましい

あの人と同じ大地で暮らせる貴女が羨ましい



湖の氷もかなり溶けて 仲間も旅立ちの準備に忙しい

私はひとり悠々と 湖の上で眺めている

仲間の身づくろいを 眺めている

私があの人に出会ったのは まだ冬になったばかりの時

私がここへ飛んできた頃だった

湖の畔で私をじっと見つめるあの人に 私は心を奪われた

私は白鳥 あの人は人間

叶えられない恋だとは 最初から知っていた

それでも私はあの人を 見ているだけで良かったのに





白鳥達も雁達も 今年生まれた若鳥も

故郷までの厳しい旅を

乗り越えられるように願いながら

湖面で並んで 待っている

旅立ちの日を待っている

春を呼ぶ精霊が 私の耳元でまた囁く

「来年になれば又ここへ来る

お前も旅立つ準備をしなさい

この地でひとりで過ごせるのか 厳しい夏を生き抜けるのか」



あの人と同じ空気を吸ってみたいと 願う私が愚かなのか

春を呼ぶ精霊は 哀れみの目で私を見た

根明けは日ごとに広がって

緑の草が勢いを増す 旅立つ日はもう近い

「お前の気持ちが変わらないのなら

私ができることはただ一つ

昼はお前を涼しい風に変えよう

夜は元の姿に戻るのだ

どこか湖の片隅で 一人で朝を待つが良い」

春を呼ぶ精霊は 私に薄いブルーの目を向けた



湖から 次から次へと仲間が飛び立ち

春を呼ぶ精霊も 北の国へと出発した

昼間 私は大気の中で涼しい風となり あの人を包む喜びに浸る

夜になれば白鳥の姿に戻り 秘境の湖でひっそりと過ごす

もしもあなたが山奥の 人の知らない湖で

夜を過ごすことがあったなら

もしもあなたが湖で 人に恋した白鳥を

見かけることがあったなら

どうかそっと見守って 静かにそこを離れて欲しい

それが私の切なる願いなのだから

-end-